

紅型における「同一模様」の比較と考察
－「松皮菱繋ぎに檜扇団扇椿菊模様」を例として－

與那嶺 一子、篠原 あかね

A study of Comparison about the same patterns in bingata
－ in case of design of interlocking pinebark lonzenge with folding wooden fan, round fan, chrysanthemum, camellia －

Ichiko YONAMINE, Akane SHINOHARA

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第16号別刷

2023 年 3 月15日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.16
March, 2023

紅型における「同一模様」の比較と考察 —「松皮菱繋ぎに檜扇団扇椿菊模様」を例として—

與那嶺 一子¹⁾、篠原 あかね¹⁾

A study of Comparison about the same patterns in bingata

— in case of design of interlocking pinebark lonzenge with folding wooden fan, round fan, chrysanthemum, camellia —

Ichiko YONAMINE¹⁾, Akane SHINOHARA¹⁾

1. はじめに

紅型は、琉球王国時代に発展した染色技法である。防染糊で布に模様を直接描く筒描きと、型紙で防染する型染めがあり、本稿では型染めを扱う。紅型の一般的な工程は、紺屋（クンヤ、コーヤ）と呼ばれる工房で図案の作成から型彫り、染め、仕上げまでの工程を一貫して行っていた。琉球王国時代末期には、首里を中心に45軒の紺屋があったことがわかっている。¹⁾

現存する紅型型紙は、鎌倉芳太郎が大正末から昭和初めにかけて収集した膨大な資料が寄贈されたものが主で、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館に1,441点、沖縄県立博物館・美術館に588点所蔵されている。これらを元に、紅型についての基礎的な研究が進められてきた。²⁾ 沖縄県立芸術大学附属研究所による調査の中で、同一模様の型紙を下記のように分類している。

「同一型」：一緒に重ねて彫られた型紙のうちの一枚。

「同柄異型」：全く同じ柄の型紙で、別に彫られた型紙である場合。

「同構成一部違い」：同じ柄、又は同じ構成をもとに、一部分が別の柄でデザインされた型紙。

「同柄逆型」：同柄異型の型紙で型種類が逆のもの。

「同構成一部違い逆型」：同構成一部違いで逆型のもの。³⁾

このように定義される通り、紅型には、同じ模様が様々なバリエーションで表現されることがわかっ

ている。上記の定義は型紙の分類であり、染められた衣裳の場合は、布の動きや糊置き条件が一致しないため、「同一型」か「同柄異型」か判断することが困難である。そのため、本稿では、両方をまとめて「同一模様」と表記する。「同一模様」の衣裳の作例は少なく、ベルリン国立民族学博物館と沖縄県立博物館・美術館に「霞に枝垂桜」の衣裳が地色と彩色違いで残っている他、ほとんど確認されていない。⁴⁾ 一見、「同一模様」に見えても、型や彩色の違いがある場合がほとんどと言える。その表現の違いは、あえて意識的に変化をつけているようにも考えられる。「同一模様」の紅型が作られた背景について、先行研究の中で、紺屋同士の交流があったことと、図案の元となる種本により、別々の紺屋から同じ模様の紅型が生み出された可能性が指摘されている。⁵⁾

型染めの特性を活かせば、全く同じ模様を同じ彩色で再現することが可能であるにも関わらず、紅型ではそのようなことはほとんど行われなかったようである。なぜ変化をつけるのか、またどのような製作体制で作られたのか、その実態はまだ十分に解明されていない。そこで本稿では、「松皮菱繋ぎに檜扇団扇椿菊模様」の作例9点を例に、紅型の「同一模様」について考察する。

2. 調査の方法と資料の概要

(1) 調査の方法

現在確認されている「松皮菱繋ぎに檜扇団扇椿菊

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1. Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

模様」の作例は、衣裳5点、裂2点、型紙2点である。このうち調査の機会が得られた作例については、熟覧により、模様・型の種類・配色・繊維素材等を確認し、採寸により寸法・縫製・縫い糸・布幅を記録した。また全景と詳細のスナップ撮影と、可能な場合は、使用されている色ごとにマイクロスコップで拡大撮影した。なお、今回調査の機会が得られなかった資料については、過去の調査記録や画像を元に特徴を確認した。それによって得られた各資料の特徴を下記にまとめた。

(2) 資料の概要

資料の種類（型紙、衣裳、裂）ごとに番号を付した。以下、本稿ではこの番号で各資料を表記することとする。名称は、所蔵館に登録されている名称を記した。番号も所蔵館の管理番号である。寸法については詳細を（表4）にまとめた。なお、掲載画像は撮影環境が異なるため、実際の色とは差異がある

型紙1

名称：松皮菱繫に扇団扇菊模様白地型紙

所蔵：沖縄県立博物館・美術館

番号：39

寸法：縦55.0cm 横42.0cm

（内寸縦44.6cm 横37.5cm）

型種類：白地型 大模様型 大柄

銘：佐久本 沢嶌/巳（墨書）

備考：名称には「菊」のみ「椿」は抜けている。



型紙2

名称：松皮菱繫ぎに扇菊牡丹模様白地型紙

所蔵：沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館

番号：4239

寸法：縦56.8cm 横42.5cm

（内寸縦45.6cm 横38.0cm）

型種類：白地型 大模様型 大柄

備考：名称では「牡丹」とあるが、模様一覧には「牡丹」は無く「椿」がある。



可能性がある。

本稿では衣裳の形体や縫製について述べていないが、胴衣という特異な衣裳形体について簡単に触れておく。

胴衣は琉球・奄美ではドゥジン、ドギンと呼ばれ、史料では「胴衣」と示される。近年になり「胴衣」と当てられるようになる。特徴は下記のとおり。

裾（カカン）と対で身に着けるもので、身丈が対丈のものは「スディナ」と呼ばれる。

単衣、衿があり、素材は芭蕉、苧麻、木綿、絹がある。衿は単衣、衿ともに衿に仕立て、表に返して着用する例が多い。袖丈は短く、袖付けが丸く曲線を描くものや、襠（ワチスビ）がつくものなどがある。衽は上前が広く、下前幅が狭い例もあるが、同幅もある。また、衽には襷がつく場合もある。脇には裾からスリット（馬乗（ハサ））がある。それが無い例もある。

衣裳 1

名称：木綿黄色地松皮菱繋ぎに檜扇団扇菊椿模様胴衣

所蔵：沖縄県立博物館・美術館

番号：1081

時代：第二尚氏時代 19世紀

寸法：丈86.5 衿64.0

素材：木綿

染色：片面染 大模様型 大柄 白地型

備考：スリット（馬乗）あり（20cm程）。襷なし。台帳の資料名称は「牡丹」とあり「菊・椿」は記載されていない。葉の形状から「牡丹」は「椿」か。



衣裳 2

名称：黄色木綿地三階菱続き菊花椿花扇子団扇模様紅型衣装

所蔵：東京国立博物館

番号：I-2770

時代：第二尚氏時代 19世紀

寸法：丈97.0 衿62.1

素材：木綿

染色：片面染 大模様型 大柄 白地型

備考：スリットあり（左21cm、右33.5cm）。襷なし。上前衿にひだあり。



Image : TNM Image Archives

衣裳 3

黄地松皮菱繋ぎ檜扇団扇菊椿文紅型胴衣

所蔵：九州国立博物館

番号：I246

時代：第二尚氏時代 19世紀

寸法：丈91.5cm 衿64.5cm

素材：木綿

染色：片面染 大模様型 大柄 白地型

備考：スリットなし。右のみ襷あり。下前衿にひだあり。型送りは一方付け。タグ（こより）に「金貳拾円」の墨書。



衣裳 4

名称：木綿黄色地松皮菱繋ぎに扇団扇菊椿模様胴衣

所蔵：日本民藝館

番号： —

時代：第二尚氏時代 19世紀

寸法：丈102.5 衿63

素材：木綿

染色：片面染 大模様型 大柄 白地型

備考：スリットあり（22.5cm）。襷なし。

衿に3本のひだあり。椿や菊の葉は青と墨、
枯れ葉表現、濃桃色がある。「高級祝女用」。



衣裳 5

名称：木綿松皮菱繋ぎに扇菊椿模様胴衣

所蔵：サントリー美術館

番号：染61

時代：第二尚氏時代 19世紀

寸法：丈71.0 衿68.1 袖丈27.1

素材：木綿

染色：片面染 大模様型 大柄 白地型



裂 1

名称：木綿黄色地松皮菱繋ぎに団扇扇菊椿模様紅型裂

所蔵：サントリー美術館

番号：73-34

時代：19世紀

寸法：縦53.4 横35.5

素材：木綿

染色：片面染 大模様型 大柄 白地型



裂 2

名称：水色地松皮菱繋ぎに団扇扇菊椿模様裂地

所蔵：サントリー美術館

番号：73-21

時代：第二尚氏時代 19世紀

寸法：縦52.0 横39.1

素材：木綿

染色：片面染 大模様型 大柄 白地型



3. 比較と考察

各資料を比較する上で、図柄を構成する模様を構成要素として13に分けた。(図1)

器物を表す模様として、要素1が扇、要素2が檜扇、要素3が団扇である。花を表す模様として、要素4、5が椿、要素6、7、8が菊、そして要素9、10、11、12が桔梗である。そして要素13が地紋となる松皮菱である。これら13要素は、今回取り上げた資料9点に全て共通している。構成要素ごとに資料を比較したものが(表1)である。紙面の都合により、要素13松皮菱の比較画像は割愛した。

(1) 構成要素について

比較の結果、9点は「同一模様」であり、3つのタイプに分類できることがわかった。それぞれをAタイプ、Bタイプ、Cタイプとして考察する。(表2)

最も違いが現れているのは、要素2 檜扇である。檜扇の表現においては、型紙1と衣裳1の2点がAに分類され、その他6点がB、Cである。Aに分類される檜扇の板は、扇の先から持ち手部分まで1枚で表現されているのに対して、BとCでは、持ち手から3分の1の部分で扇の骨のように透かす表現がされている。つまり、檜扇と扇の明確な描き分けがされているのはAのみで、BとCでは檜扇と扇が合体した表現になっている。また、檜扇の模様にも違いがあり、AとBは扇の板に点打ちで霞のような表現がされているのに対し、Cは点打ちで丸を表している。

檜扇以外では、要素8 菊3に違いがある。AとBでは、扇の近くの菊から右下に延びた茎に葉が繋がっている。Cでは、さらにそこから手前の菊にも茎が二股に分かれる表現がされている。

全ての要素を詳細に比較した結果、明確な違いが見られるのは要素2 檜扇と、要素8 菊3の2カ所だった。またタイプごとの違いはなく、全てに共通する特徴的な表現として、要素7 菊2は、本来扇の背後に隠れる部分が手前にきてしまい、扇の角に食い込んで描かれている様子が確認できる。(下図、丸枠内参照。)



衣裳1 (部分)

また、要素9～12 桔梗1～4は、松皮菱の背後に描かれている。松皮菱繋ぎは地紋だが、桔梗を背後に描くことで、さらに奥行き感を見せる工夫がされていることがわかった。



型紙 1



衣裳 1

これらの特徴的な表現が9点全てに共通していることから、それぞれの資料の型紙を作成する際には、手本となる図案が存在したか、もしくはオリジナルとなる型紙を写している可能性が考えられる。これは先行研究を裏付ける結果となる。

(2) 彩色について

地色は9点のうち1点のみ水色地で、その他は黄色地である。経年による褪色を加味しても、黄色の色味はそれぞれ異なるように思える。科学分析をした作例がないため判断できないが、マイクロスコップで確認すると、繊維の奥まで色が染み渡っている様子から、フクギやウコン、ヤマモモなどの染料である可能性が考えられる。

色差しに使われる主な色として、朱色（檜扇や扇、椿、菊、桔梗）、臙脂（檜扇や扇、椿、菊）、藍（檜扇や扇、菊、葉）、墨（檜扇、扇、団扇、菊など）、紫（花、松皮菱繫など）がある。

使用される色材はある程度共通しているが、配色はかなり異なり、同じように染めないことを意識しているかのようである。衣裳2と衣裳4については、扇と檜扇の特徴的な配色が共通していることから、同一工房である可能性が考えられるが、判断するのは難しい。その他の作例は、工房や製作者が同一でないと考えられる。ただし、自由に彩色されているように見える一方で、要素6菊1の左側の菊と、要素8菊3の右側の菊を白抜きにすることはすべての資料に共通している。またCタイプに分類した6例では、桔梗を朱で色付ける点が共通している。規則性が全くないようだが、共通した美意識があるようにも感じられる。

(3) 衣裳の柄合わせについて

「松皮菱ぎに檜扇団扇椿菊模様」の図柄は上下が明らかな構成である。しかし、縫製をみると、肩山

で型置きを反転させ、身頃の前後、双方から上下が分かる型送りではなく、糊を置く際に一方向で型置きされている事がわかる。例えば前身頃は正位置であるなら、後ろ身頃は上下逆位置となる。

衣裳の柄合わせを比較したものが表3である。比較したのは後身頃のみで、衿や衤を含めた前身頃（前面）は、要素が多くなるので、分析対象としなかった。矢印は図柄の向きである。上向きは正位置、下向きは逆位置を示す。

衣裳1、衣裳2、衣裳3の作例では、身頃の片方は正位置、もう片方は逆位置になる。衣裳4は後身頃は正位置、前身頃は逆位置である。衣裳5は後身頃は逆位置、前身頃は正位置となる。

袖は、衣裳3、衣裳5が正位置で、前は逆位置になる。衣裳1の袖は、上記とは逆に、前が正位置になる。衣裳2と衣裳4は左右で配置が異なる。

各衣裳の柄合わせから、縫製は同一人物によらないことは明らかである。また、チーフとなる者がまとめて各縫製者に依頼したとするなら、なんらかの統一したイメージの共有はなされたと思われるがその様子もみられない。

4. まとめ

琉球王国時代に発展した紅型は型紙、衣裳、裂などが現存するが、史資料はほとんど残っていない。その技法、色材や用材は戦前の聞き取りと考察による事が多く、紅型の全容解明には至っていない。

現存する型紙や染められた衣裳などの調査報告から「同一模様」の作例には、彫りに違いがみられるものや、図柄の一部違いなどがあることが明らかとなっている（参考2・4）。現存する作例は「同柄異型」や「同構成一部違い」がほとんどであり、紅型が「同一型」で何度も染めるものではないこともわかってきた（参考3）。

「松皮菱繫ぎに檜扇団扇椿菊模様」の作例は、「同一模様」で染められた珍しい作例であり、比較を試みた結果、次のことが確かめられた。

① 「同一模様」に見えるが、3つのパターンがあること。

「同一模様」の作例9点を分析した結果、型紙は3パターンあり、そのうち2パターン（Bタイプ、

Cタイプ)は「同構成一部違い」であることが分かった(表2)。Aの型紙のみ「佐久本」「沢嶌」の墨書の銘があり製作工房は「沢嶌」と思われる。

3パターンを比較すると、Aタイプを除き、Bタイプ、Cタイプは檜扇の下部に扇子にあるような骨がみられる。また、檜扇に描かれた模様はAとBは同じだが、Cは全く異なる。檜扇の形として正しいAから扇子型のBへと変化し、扇の模様の異なるCへと変化したと考えられるが、逆とも考えられ、どちらが先に作成されたのか判断が難しい。⁶

② 「同一模様」(Cタイプ)による作例が複数あること。

Bタイプは型紙2のみで、染色された作例はなかった。一方でCタイプは衣裳と裂が6例確認できた。これまでの先行研究では「同一模様」による染色例はほとんどみられないことから、「同一型」「同柄異型」による染色はなされていないのではないかと考えられてきたが、6例もあることが明らかになった。さらに重ね彫りされた「同一型」である可能性がある。ただし糸掛け型紙は糊置きの際に型紙がずれることがあり、断定はむずかしい。

③ 衣裳・裂の作例のうち黄地の場合、松皮菱の色以外は彩色が異なること。

彩色を構成要素別に比較した表1でわかるように、全く同じ彩色のものは見あたらない。衣裳2と衣裳4は、檜扇、扇の下部、菊に青い色を後差しするなど、共通する彩色があるが、細部は異なっている。また、葉の彩色に緑系統の色と青系統の色の両方を使っている例(衣裳1)もあれば、赤系統の葉が加わる例(衣裳3)、青系統の葉のみの例(裂1)、枯葉の表現がみられる例(衣裳2、衣裳4、衣裳5と裂2)などがある。裂1のみ地色(水色)が他の作例と異なっており、このような地色違いも多数あった可能性があり、この図柄が好まれていたことがわかる。このような作例毎の彩色の違いから、製作にあたり統括する者がいなかったことが考えられる。おそらく同一工房での製作ではないと思われる。

④ 基布は手紡ぎのS撚り木綿単糸だが、密度と布幅が異なること。

基布は、衣裳1、衣裳2、衣裳3を調査し、衣裳4については公開された情報になる。経緯ともにS撚りの手紡ぎの木綿単糸であることは共通している。しかし、衣裳1と衣裳2、衣裳3の織り密度の比較と、布幅(33.5~36.5cm)をみると、同一の布ではないことがわかる。

⑤ 縫製はカカン(裳)と対で着用する胴衣という形態は同じだが、寸法は各作例で異なること。

調査した2例(衣裳1、衣裳3)の縫い糸は太目の黄色系統の木綿糸で、粗く縫われている。琉服の特徴である袖下のワチスビ(襷)は衣裳3のみ右側についており、衣裳3の脇には開き(馬乗)がなく、縫い綴じられている。さらに、胴衣の衽は上前と下前で幅が異なり、上前が広い傾向がある。衣裳2、衣裳3と衣裳4には衽の衿付け部分に3段の襷が取られているが、衣裳1にはその様子がみられない。衣裳の寸法も統一されていない。

縫製については調査が不十分なため、ここまでとするが、この縫製の違いも、同一工房によるものではないことを示していると考えられる。

⑥ 柄合せも各作例で異なること。

染色は大模様型の片面染で模様が肩山で反転する模様付けではなく、一方向に進む一方付けである。衣裳の柄合せは(表3)で示すように、5例とも異なっている。

以上の①~⑥が指摘できる。また、衣裳の製作目的や用途については、衣裳4のみ「高級祝女用」とあるが、他の衣裳については旧蔵先の詳細情報が少なく不明である。衣裳3には「金貳拾円」の紙片がついており、売買されていたことがうかがわれる。

琉球王国崩壊以後、琉球の文化遺産は流出し、来沖した官吏や教員、研究者、京阪の呉服商などが琉球の紅型を収集していた。この衣裳もそのようなものと思われる。ちなみに明治17年独逸国が農商務省を通じて収集した琉球コレクションの清算目録には王子按司階級の女性の「木綿形付単小袖」が「四円」とあり、衣裳3の値段が高騰している様子がうかがえることから、調査した衣裳の製作はもう少し後になる可能性もある。また売買時期もかなり後だった

と考えられる。

基布や「同一模様」が使われている点から、製作は同時期と思われるが、多少の差異があるかどうか、現時点では判断ができない。

衣裳の色差しはかなりゆるやかで、他の模様の色が重なっても構わない様子がうかがえる。縫製も同様であり、何かの行事に合わせて、急ぎ複数の工房で染色し、何名かの縫製者によって縫われた様子がみられるが、これ以上の追求は難しい。

また、流行の柄として、それぞれの工房で染められたとも考察でき、彩色や縫製の違いは同一であることを避けた結果とも考えられる。今回の考察の結果は、紅型を染める紺屋それぞれで、「同一模様」を染めることが許されていたことを示すものといえる。紺屋同士で図柄の共有、発注を受けた衣裳を手分けして染めるなどの事もあった可能性が考えられる。

本調査の結果「同一模様」であっても統一感がないことが結論としてみえてきた。この特徴は紅型以外の琉球王国時代の美術工芸にもみることができる。

その例として当館が実施した琉球王国文化遺産集積・再興事業（2016年～2022年度）での成果を紹介する。

沖縄県内や奄美地方には15世紀の刺繍衣裳が残っており、その模造のための原資料調査において、刺繍製作が複数人によってなされていたことが確認できた。

また同事業で模造された、ビーズを立体的に編む御玉貫の例では不揃いのビーズ玉が製作に有効だったことが判明した。

沖縄・奄美各地に残る縫取織は衣裳や手巾にみられるが、不均衡な模様構成が特徴である。

このような研究成果から、琉球でのものづくりでは細部にこだわらず、全体的な形を優先する傾向が多くあることがわかってきた。

結論は、少々先走りの感があるが、「同一模様」でありながらも、同じ彩色を施すことは避けられていたと思われる。また、同じ儀礼で使用することがあるとしても、完全なる一致というよりは、全体的に見た際の統一感を目指していたようにも思え、これは琉球特異の美意識によるものと考えられる。

本稿の執筆にあたり、「1. はじめに」、「2. 調査

の方法と資料概要」、「3. 比較と考察（1）構成要素について、（2）彩色について」は篠原が、「3. 比較と考察（3）衣裳の柄合わせについて」と、「4. まとめ」は與那嶺が担当した。

本研究にあたり、東京国立博物館、九州国立博物館には調査をご承諾いただき、さらに写真の提供もあり感謝申し上げたい。日本民藝館、サントリー美術館、沖縄県立芸術大学には写真の提供及び利用についてご快諾いただいた。また、桑原有寿子氏には檜扇について貴重な情報を提供いただいたことなど、ここに記してお礼申し上げる。

註

- ¹ P.150「御財制」那覇市史資料編第1巻第10『琉球資料（上）』那覇市 平成元年
- ² 調査・研究の概要は参考文献1～4にまとめて報告されている。
- ³ p.10『沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵 鎌倉芳太郎資料集 第一巻 紅型型紙（一）』沖縄県立芸術大学附属研究所、2002年
- ⁴ ただし、型は左右逆使いである。
- ⁵ 與那嶺一子「紅型における同一模様と紺屋の関わりについて～「霞松大函梅模様」を例にした～」『沖縄県立博物館紀要第25号』沖縄県立博物館、1999年
- ⁶ 松皮菱の形を比較すると、AタイプとBタイプでは角張っているのに対して、Cタイプでは丸みを帯びていることが指摘できる。

参考文献

- ¹ 『企画展「紅型衣裳と型紙」』、沖縄県立博物館、1985年
- ² 『沖縄の染織（Ⅱ）紅型型紙編』沖縄県教育委員会1997年
- ³ 與那嶺一子「紅型における同一模様と紺屋の関わりについて～「霞松大函梅模様」を例にした～」『沖縄県立博物館紀要第25号』沖縄県立博物館、1999年
- ⁴ 『沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵 鎌倉芳太郎資料集 第一巻 紅型型紙（一）』沖縄県立芸術大学附属研究所2002年

- ⁵ 山田葉子「類似する那覇市歴史博物館所蔵紅型衣裳と鎌倉芳太郎収集紅型の比較と考察」『沖縄染織研究会通信Vol.111』沖縄染織研究会2022年
- ⁶ 『日本民藝館所蔵沖縄染織品 第3巻 紅型』沖縄県立芸術大学附属研究所2018年
- ⁷ 寺田貴子「琉球文化圏に伝世する刺繍品：伊是名島名嘉家旧蔵15世紀総刺繍大袖衣」『活水論文集 健康生活学部編』活水女子大学 2017
- ⁸ 『琉球王国文化遺産集積・再興事業報告書』沖縄県立博物館・美術館2022
- ⁹ 佐々木、萩尾、與那嶺「農商務省より独逸宛の沖縄関係物品目録について（下）」『沖縄県立博物館紀要 第23号』1997
- ¹⁰ 『沖縄復帰40周年記念紅型 琉球王朝のいろとたち』サントリー美術館、2012年
- ¹¹ 辻合喜代太郎・橋本千栄子「第一章 服制と琉装」『琉球服装の研究』関西衣生活研究会 1991年
- ¹² 『原色染織大辞典』（株）淡交社 1977年
- ¹³ 「始めて百官及び婦女の服を定む」『球陽 読み下し編』球陽研究会編 角川書店 1974年

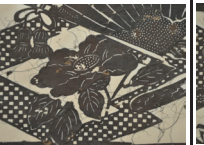
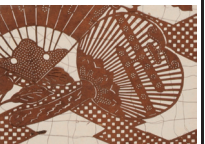
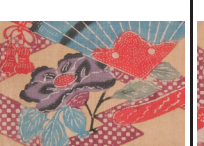
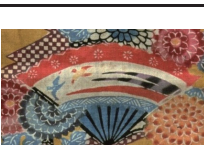
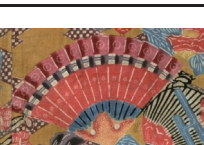
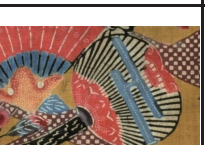
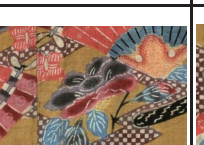
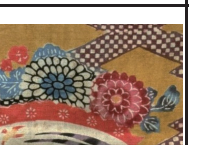
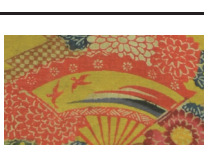
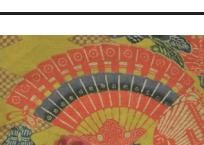
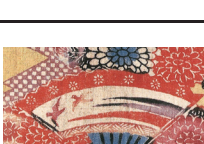
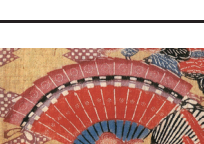
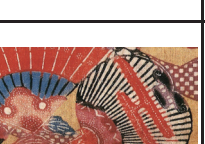
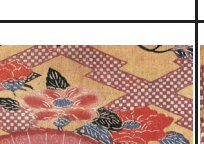
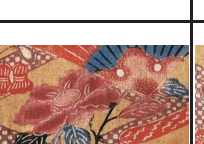
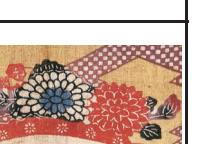
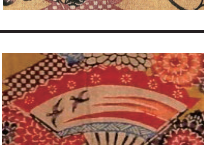
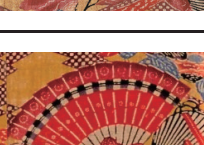
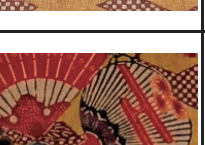
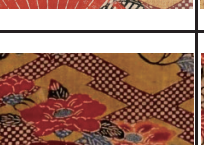
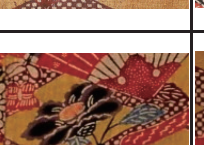
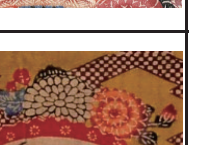
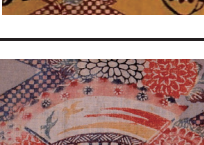
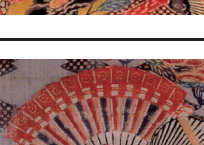
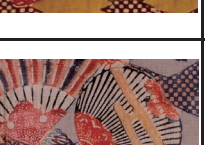
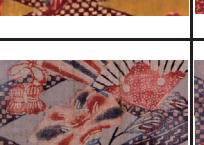
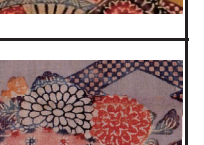
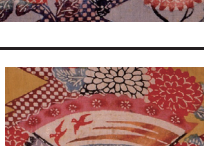
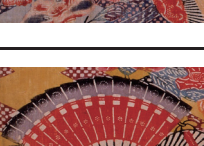
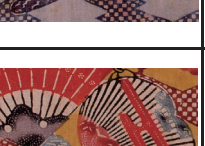
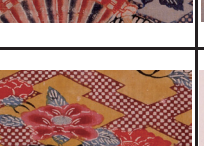
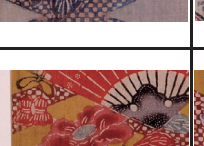
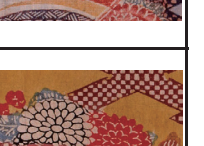
図柄を構成する個々の模様は、全体を繋ぐ引田絞りを模した松皮菱と、下記のとおり12の要素で表されている。主となる模様から順に要素番号をあて、複数ある要素は種類ごとにさらに番号をあてた。



型紙1（沖縄県立博物館・美術館）

図1 構成要素

表 1 構成要素比較表

	要素1 扇	要素2 檜扇	要素3 団扇	要素4 椿 1（檜扇上）	要素5 椿 2（檜扇左）	要素6 菊 1（檜扇上）
型紙 1						
型紙 2						
衣裳 1						
衣裳 2						
衣裳 3						
衣裳 4						
衣裳 5						
裂 1						
裂 2						

要素7 菊 2	要素8 菊 3	要素9 桔梗 1	要素10 桔梗 2	要素11 桔梗3	要素12 桔梗4	型の パターン
						Aタイプ
						Bタイプ
						Aタイプ
						Cタイプ
						Cタイプ
						Cタイプ
						Cタイプ
						Cタイプ
						Cタイプ

タイプについては表2を参照のこと

表2 分類

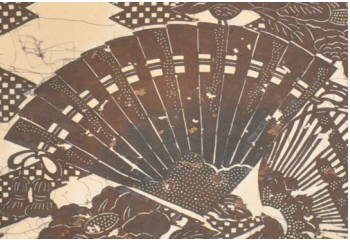
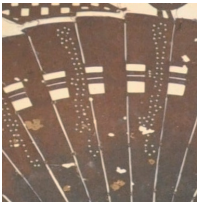
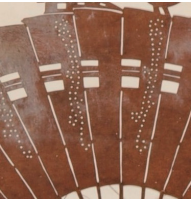
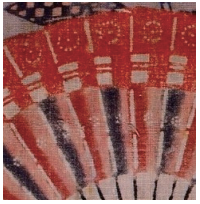
	Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ
型紙の パターン			
	型紙1 (沖縄県立博物館・美術館)	型紙2 (沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館)	型紙1 (サントリー美術館)
檜扇			
檜扇部分			
菊部分			
特徴	・衣裳は檜扇の飾金具に丸い穴がみられるが、型紙には穴がなく、衣裳は厳密にはA'タイプといえる。	・要素及び配置はAタイプと同じ。 ・檜扇の下部は扇のような柄が表現されている。 ・松皮菱の市松表現もAタイプにほぼ同じ。	・要素及び配置はA・Bタイプと同じ。 ・檜扇の下部はBタイプと同じ。 ・檜扇の模様はA・Bタイプとは異なる。 ・菊3から伸びる茎の形がA・Bタイプと異なる。 ・松皮菱の市松表現がA・Bタイプと若干異なり、丸みのある正方形に近い。
該当する資料 (所蔵館)	型紙1 (沖縄県立博物館・美術館) 衣裳1 (沖縄県立博物館・美術館)	型紙2 (沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館)	衣裳2 (東京国立博物館) 衣裳3 (九州国立博物館) 衣裳4 (日本民藝館) 衣裳5 (サントリー美術館) 裂1 (サントリー美術館) 裂2 (サントリー美術館)

表3 衣裳の柄合わせの比較

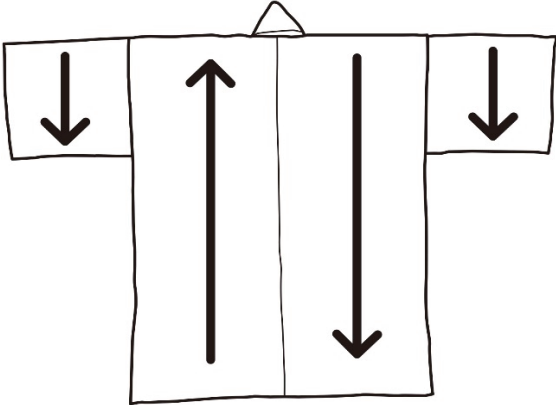
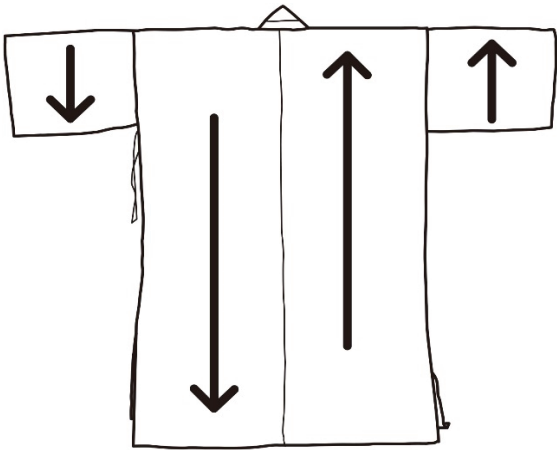
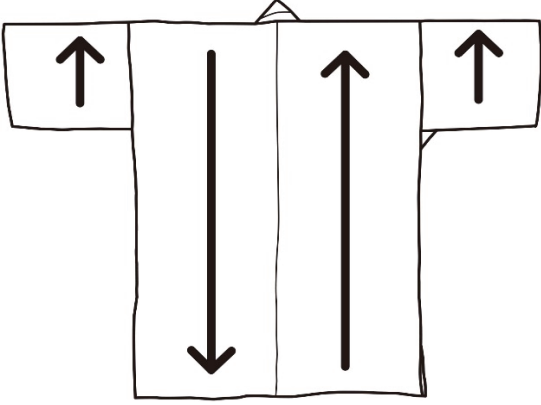
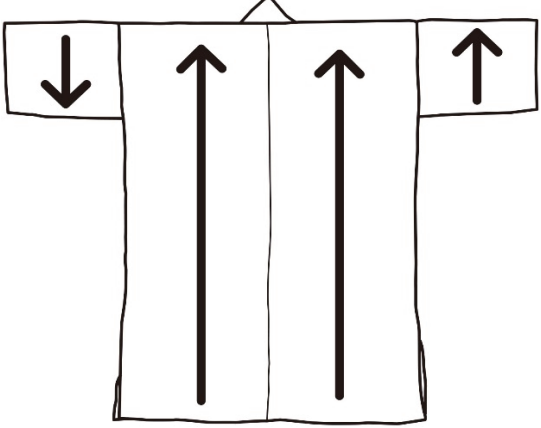
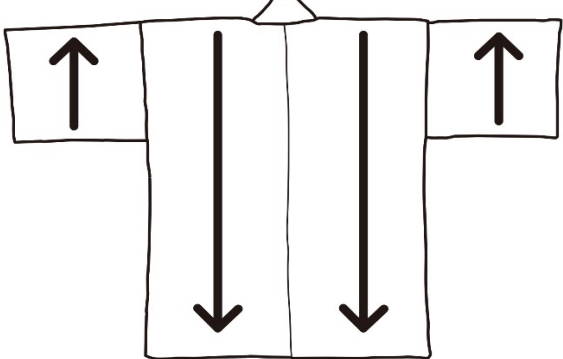
	
衣裳 1（沖縄県立博物館・美術館）	衣裳 2（東京国立博物館）
	
衣裳 3（九州国立博物館）	衣裳 4（日本民藝館）
	
衣裳 5（サントリー美術館）	

表4 衣裳（胴衣）の寸法比較表

単位はcm / （上）は上前身頃、（下）は下前身頃を示す / （S）はS撚りを示す
 衣裳3は『日本民藝館所蔵沖縄染織 第3巻 紅型』沖縄県立芸術大学附属研究所 2018年を参照
 衣裳4は既に公表されている寸法を表示

	衣裳1	衣裳2	衣裳3	衣裳4	衣裳5
所蔵館	沖縄県立博物館・美術館	東京国立博物館	九州国立博物館	日本民藝館	サントリー美術館
形態1	単衣（胴衣）	単衣（胴衣）	単衣（胴衣）	単衣（胴衣）	単衣（胴衣）
形態2	大人用	大人用	大人用	大人用	大人用
布幅	36.0	33.5	36.0～35.0	36.5	未計測
素材	綿(S)、綿(S)	綿(S)、綿(S)	綿(S)、綿(S)	綿(S)、綿(S)	未計測
密度(1cm間)	経26本、緯20本	経21本、緯21本	経20本、緯17本	経20本、緯14本	未計測
身丈	86.0	97.0	92.0	95.0	71.0
衿	64.0	62.1	63.5	63.0	68.1
前幅（裾）	35.5	32.5	34.0	33.6	未計測
前幅（衿下）	34.0（上） 34.5（下）	6.0	34.5	30.5（上）	未計測
前幅（袖下）	33.0	28.0	31.0	29.0（上）	未計測
前幅（剣先）	31.5	27.5	30.5	28.2（上）	未計測
後幅（裾）	35.5	未計測	35.5	35.5	未計測
肩幅	35.0	32.5	34.5	34.5	未計測
袖幅	29.0	27.5	29.0	28.5	未計測
袖丈	28.5	22.5	27.5	22.5	27.1
袖付け	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測
身八口	なし	なし	なし	なし	未計測
襷	なし	なし	5.0, 4.0 （右のみ）	なし	なし
衽幅	23.0（上） 10.5（下）	衽幅未計測 衽に襷（3段）あり	10.5（上） 22.0（下） 下前に襷（3段）あり	16.3（上） 5.5（上） 上前衽に襷（3段）あり	未計測
合妻幅	23.0（上） 10.5（下）	未計測	10.5（上） 12.0（下）	5.3（上）	未計測
衿下	50.0（上） 41.0（下）	8.0（上） 55.0（下）	36.6（上） 38.0（下）	54.5（上）	未計測
衽下	13.0	10.0	24.0（上） 25.0（下）	16.0	未計測
衿肩あき	6.0	7.0	6.0	8.8	未計測
衿幅	17.5	15.5	13.5	14.0	未計測
衿長	55.0（上） 53.0（下）	未計測	65.0（上） 64.8（下）	52.5	未計測
馬乗（ハサ）	20.2	33.5（右） 21.0（左）	無し	22.5	未計測
備考	衿は袷・返し衿 縫い糸は黄色の木綿糸と 紺の木綿糸。別糸による 縫い直しもみられる。	衿は袷・返し衿 左脇に紐（長さ20、幅 3）あり。 縫い糸は白い木綿。縫い 直しをした形跡がほとん ど見られない。	衿は袷・返し衿 縫い糸は黄色の木綿糸	衿は袷・返し衿 縫い糸は紺の木綿糸。左 脇内側に縮緬の紐あり。 右脇に乳の代用と思われ る白い木綿糸あり。	衿は袷・返し衿